

青い将来

愛知県立農業大学校 教育部農学科 酪農専攻 2年 酒井 太朗

酪農は、今の私を作ってくれました。そして私は、数年後に自身による酪農経営を目指します。

私は小さいころから動物が好きで、中学のころに働く動物である家畜に興味を持ち、職業体験で市内の酪農家を訪問しました。私はその二日間で酪農にのめり込みました。動物園の動物であれば誰でも観覧できます。しかし、酪農は一般人の目に触れることが少ないため、私の疑問は尽きませんでした。そこから自分の知識欲の赴くままに進路を考えるようになったのです。

しかし残念ながら、私の第一志望だった農業高校に合格せず、近くの普通科高校に通いました。そこから推薦入学でようやく我が愛知県立農業大学校の門をくぐることができました。ところが、私の思い描いた酪農とは大きくかけ離れていました。あったのは、ミスを繰り返し牛を待たせる同級生、分娩周産期病の多発、日々の飼養管理を見つめ直そうとしない先輩たち。この飼養管理の中で、牛が出産するたびに手術を繰り返し、廃牛になるようなことが数ヶ月続きました。私はそんな生活に嫌気が差して孤立し、アルバイト先の牧場などで愚痴ばかりが多くなりました。

そんなとき、ある酪農家と出会ったことから私と我が校の酪農は変わっていきました。九月初旬に共進会出品牛の毛刈り講習がありました。愛知県ホルスタイン改良同志会の指導の下に、県下の酪農家や従業員の方々と共働して行いました。私はその頃ショーが嫌いで、「何でこんなことやらないといけないだ。」とイライラしていました。でも、すごく楽しそうにしていた一人の酪農家さんと話をしたら、心が洗われたような気がしました。そして、数週間後に大学校の学習の一環である40日間の農家派遣実習が始まりましたが、私はその派遣中、もやもやしていました。その酪農家さんに連絡を取って休日に遊びに行きました。そこで半年近く自分の胸の内にあった思いを全部言いました。そして、私は怒られました。「お前無いものねだりばかりして今まで何かやってきたのか？何も出来てねえじゃねーか。あともうちょっとみんなと仲良くやってみろ。」と言われ、そこから現状の中で改善を考えるようになりました。例えば、分娩周産期病のうち本校の中で一番多かった第四胃変位の改善のために、購入したスーダンの中でいいものを取り置きして乾乳期に食べただけ食べさせる飼い方に変えました。二日に一回だった六ヶ月齢以下の育成牛の除ふんを一日一回にして、除ふんの際に下痢をしていることが確認できれば石灰散布をしたり、哺乳期の誤嚥を防ぐために荒めのオガコを選ぶことを徹底しました。成牛には、蹄のことを考え細かいオガコを使うようにしました。独房除ふんも一日二回だった除ふんを

三回にして清潔に保つようになりました。そのころから私はあまりイライラしなくなり、だんだん周りと打ち解けられるようになって学校生活や実習が楽しくなりました。そして、周りも私に対して関心を持ってくれるようになり、今まで一人でやっていた各牛舎の夜の見回りも手伝ってくれるようになりました。それまで少数の牛にしか目配りできていなかった専攻は牧場全体に目が行き届くようになり、自分にも余裕ができてショーをやってもいいかなと思うようになりました。

今年の三月のブラックアンドホワイトショーに我が校から一頭出品しました。その際にくだんの酪農家さんに「お前は今回サポートに回れ。」と言われ飼料や道具の準備、牛の腹作りなどをし、会場では周りの酪農家さんの牛に気を配り、洗体の手伝い、毛刈り補助など、とにかくがむしゃらにがんばりました。そのときにある酪農家さんの出品牛の艶出しをしました。その酪農家さんは、乳質はいつもトップクラス、繁殖成績や生産性、人柄などどれを取ってもすごい人で、県内でも有数の優良酪農家さんでした。その酪農家さんの牛が出品した部で勝ち、写真撮影の際に「お前も写真と一緒に入れ。」と言ってくださいました。私は、そのときにどうしたら良いのか分からなくて動揺しました。「いいんですか？ 僕は何もしていないじゃないですか？ 艶出しだけですよ？」と言ったら、その酪農家さんは「いやお前のおかげで勝てたんだよ。」と言いました。私はすごく嬉しくて、初めて今までしてきたことが報われた気がしました。その後「来年うちで働かないか？」と言われました。私はその時に酪農家で働こうと決めました。

先日、その酪農家さんに就職活動の面接にうかがいました。そこで社長の考えを聞きました。「君を一生雇用するだけの金はうちにはない。その代わりに私は君を20代のうちに酪農経営ができるように育てる。」と言ってくださいました。その一言で、酪農家になることが私の夢になったのです。私は今まで周りから期待されたことなどないと思っていたし、評価されたこともなかったのですごく嬉しかったです。酪農家さんがここまで期待してくれることに応えたいのと、夢を叶えたい二つの思いがあります。私は、この先に待ち受けているのが辛い道だろうと乗り越えるようがんばっていきたいです。私の夢としては、自分の子供たちが成人するころには、牧場を二つ持ちたいです。そのための数年後の構想としては、つなぎ飼い牛舎で全部入れて80頭の牛舎を居抜きで購入したいです。全部入ってなくても徐々に増やせばいいので、60頭から70頭飼えばいいです。そして、給与する餌はTMR。残餌は自家産のF1に給与して、ある程度肉がのったら出荷し、その肉の代金を臨時ボーナスみたいな形で受け取ります。軌道に乗ってきたら「増頭規模拡大」これに尽きます。余裕ができたなら、自家育成を行う育成舎を建設し、それに伴ってつなぎ飼いからフリーバーンに移行、そして飼養規模200頭にします。200頭中半分と肉牛半分には、性別別精液をつけます。なぜ私がこの繁殖形態をとるかということ、今の酪農経営では

全体の三割から四割程度しか性判別精液が用いられていませんが、現状の初妊牛高騰、肉牛の仔牛価格高騰に対応するためには、後継牛を安定して自家生産できるようになることが必要と考えているからです。

私は、この先に待ち構えている酪農のまだ見えぬ情勢と経験不足を乗り越え、県内トップの優良酪農家を目指すことで、私を育ててくれた酪農家さん方に恩返しをしたいです。そして私が愛知県の酪農を牽引していけるようになりたいです。私は自分の力で青い将来を必ず掴み取ります。